

中等教育研究開発室年報 第33号（2020年3月31日発行）別冊電子版
2019年度 授業実践事例

芸術科（音楽） 中学校第1学年

カノンの面白さを探す—輪唱・輪奏曲の創作を通して—

授業者 増井 知世子

（教育研究大会 公開授業）

広島大学附属中・高等学校

中学校 音楽科学習指導案

指導者 増井知世子

日 時	令和元年 11 月 29 日 (金) 第 1 限 (9:30~10:20)
場 所	第 2 音楽室
学年・組	中学校 1 年 A 組 44 人 (男子 24 人, 女子 20 人)
題 目	カノンの面白さを探す—輪唱・輪奏曲の創作を通して—
目 標	輪唱・輪奏曲の創作と鑑賞を通して、カノンの仕組みや面白さを発見することができる。

指導計画 (全 5 時間)

第 1 次 一般的に知られている輪唱・輪奏曲を歌やアルトリコーダーで演奏し、カノンの響きの面白さを感覚的に味わうとともに、カノンの仕組みを発見する。創作にあたっての確認事項 (学習の見通しや記譜の方法など) を理解する。

(1 時間)

第 2 次 創作とグループでの作品検討 (3 時間)

第 3 次 クラスでの作品検討とカノンの楽曲鑑賞および学習の振り返り

(1 時間: 本時)

授業について

カノン (canon) は、複数の声部が同じ旋律を異なる時点からそれぞれ開始して演奏する様式の曲である。一般に輪唱と訳されるが、輪唱が全く同じ旋律を追唱する (無限カノンと呼ばれる) のに対し、カノンでは、異なる音で始まるものが含まれる。

輪奏曲を歌うとハーモニーが調和して美しく聴こえるのは、和声進行に一定の原理があるからである。例えば「かえるの合唱」や「静かな湖畔」の和声進行は I 度 (ドミソ) と V 度 (ソシレ) の繰り返しである。有名な作曲家の作品の中には、I 度、IV 度、V 度を巧みに用いたものもある。

創作活動は、作曲家が作曲する過程の追体験であり、試行錯誤を伴う。授業者は、本授業題目の「カノンの面白さを探す」という目標を達成するために、上記の和声進行の原理を初めから教えるのではなく、生徒たちが創作の試行錯誤のなかでそれを発見することを期待する。

西洋音楽はヨーロッパの教会でグレゴリオ聖歌として誕生し、それが多声音楽へ発展し、そのなかで自然発生的に調性感が生まれたという歴史をもつ。仮に生徒たちが和声進行の原理に気づかないまま感覚的に輪唱 (輪奏) 曲を創作することができた場合にも、その学習は十分に意義がある。なぜなら、生徒たちは創作における試行錯誤を通して、西洋音楽の発展過程を生徒独自の方法で体感することができるからである。

創作はアルトリコーダーを使って、まずは個人で行う。創作が進み始めた段階で 7~8 人のグループを作って教え合いや作品の検討を行う。5 線譜での記譜が困難な生徒も想定されるため、ドレミなどによる記譜を行う。作品は輪奏曲でも歌詞をつけて輪唱曲にしてもよいことにする。

本時では、グループの代表作品をクラスで検討するとともに、現存する最古のカノンの 1 つと言われる「夏は来たりぬ」の鑑賞を行う。この楽曲は、創作の学習に入る少し前に、特に何も説明せずに一度聴かせている。創作活動を経た本時で再度鑑賞し、生徒一人ひとりの聴取の深まりを期待したい。

本時の題目 創作作品の良さや面白さをクラス全体で共有し、学習のまとめを行う。

本時の学習目標

- (1) グループの代表作品を輪奏（輪唱）し、それぞれの作品の良さをクラスで共有する。
- (2) 「夏は来たりぬ」の曲のしくみを知り、カノンを味わう。

本時の評価規準（観点/方法）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
他者作品を聴き合いながら演奏することができる。/演奏聴取	他者作品の良さや面白さについて考え、共有することができる。/発表	演奏や鑑賞活動に積極的に取り組んでいる。/観察、ワークシート

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点・評価
<p><導入></p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習目標の確認 <p><展開></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体での作品の検討（演奏） ・楽曲鑑賞 <p>・学習のまとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時は、グループの代表作品をクラスで検討することを確認する。 ・リコーダーの指慣らしをする。 ・作品の書かれた楽譜を準備し、1曲ずつクラス全体でアルトリコーダーで演奏する。 ・グループのリーダーは、作品の良さや面白さについて発表する。 ・カノンにして演奏する。 ・「夏は来たりぬ」を1回目に鑑賞した際の鑑賞カードと楽譜とワークシートが印刷されたプリントを受け取る。 ・楽譜を見ながら鑑賞する。 ・1回目に鑑賞した際の感想を振り返る。 ・楽譜を見て、男声パートもカノンになっていること、世界最古のカノンであることを知る。 ・再度鑑賞する。 ・創作活動の振り返りをする。 ・時間があれば記述した内容を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に生徒作品をメロディのみリコーダーで練習済みである。カノンにはしていない。 ・メロディ演奏→曲の良さについての発表→カノンでの演奏の順に行う。 ・6グループある。発表を聞きながら良さや面白さについて考えようとしているか。 ・関心をもって鑑賞しているか。 ・リズムの繰り返し、3声、まとまりがあるなどの記述に着目させる。 ・これまでの学習について真剣に振り返りを行っているか。

実践上の留意点

(1) 授業説明

本題目の授業は、創作活動を通して聴取を深めることをねらいとする。内容としてカノンに焦点を当て、鑑賞教材として世界最古のカノンと言われる「夏のカノン」を選んだ。この楽曲を創作に入るほぼ1ヶ月前に何も説明せずに聴かせ、曲について気づいたことを書かせた。研究授業にあたる、一連の創作の取り組みの終わりに、再度この楽曲を聴かせ、聴取の深まりを確認させた。

授業にあたり留意した点は以下の通りである。

- ① カノンの身近な例として、輪唱がある。有名な輪唱曲の和声進行は、ほとんどI度とV度の繰り返しである。生徒たちにはこのことをあらかじめ教えずにカノンを創作させた。創作の試行錯誤のなかでカノンの原理を発見させることを意図したからである。
- ② 創作の条件として、アルトリコーダーで演奏可能なメロディにし、シャープやフラットは使わないこと、五線譜での記譜が苦手な生徒も想定されるため、音符ではなくドレミによる記譜にし、長さは8小節にした。
- ③ 男女混合の7~8人のグループをつくり、個人で創作した作品をカノンにして検討する時間を設定した。このことをスムーズに行うために、生徒が創作するための用紙の大きさをB4用紙の4分の1にし、回収した各作品を1枚の用紙に集約して、次時の作品検討で活用した。創作の取組みのなかで、授業者は各生徒の作品に助言を記入して返却した。
- ④ 創作の速さには個人差が見られたため、早く仕上がった生徒には複数の作品をつくることや12小節の作品をつくることを促した。
- ⑤ 上述した「夏のカノン」の聴取の深まりを確認するために、創作に先立って聴取した時の気づきメモをグループで一覧できるようにし、創作のまとめでの聴取の際に配布した。

学習のまとめとして生徒に記述させた内容について、2名の生徒のものを挙げる。

① 創作で苦労したこと

生徒A: 作曲をしたことがなかったので、まずは、リズムをつくって、ちゃんと曲になるようにすることが難しかった。

生徒B: 面白味を出すために、3度ずれ以外できれいな音の重なりを探すのが大変だった。

② グループ内で作品を演奏・批評しあった感想

生徒A: 個性が表れていて面白かった。作曲家はすごい!

生徒B: 1人で演奏するだけではわからなかった面白さが見つかった。

③ 「夏は来たりぬ」を再度聴いて発見したこと

生徒A: 前よりも音の重なりが素晴らしく聞こえた。

生徒B: リズムが違うメロディでも、輪唱するとききれいなんだなと思った。

(2) 研究協議から

生徒たちが協力して自主的に学習に取り組んでいるという感想をいただいたが、グループ発表の際に、作品の批評を指導者が述べたが、この部分も生徒にさせるとよかったという指摘もいただいた。また、創作の条件に枠を設定するよりも自由に創作させた時の方が音楽的に面白い作品ができるといった授業者の発言に対して、参加者から共感の意見も寄せられた。

